



ベトナムの長い長い、暑い一日 ～停電の頻発する町で暮らして～

うめもと ち さ こ
梅本 千佐子

在ベトナム社会主義共和国・ハイフォン市、日本語教師

サッカーのワールド・カップ南ア大会。日本が予選突破を決めた対デンマーク戦は、日本では深夜3時からの試合だったにもかかわらず、かなりのテレビ視聴率だったとか。私の住むベトナムは時差の関係で深夜1時からのライブ放映だったが、疲れて寝てしまった。

朝6時過ぎに起きて、インターネットで3対1の日本圧勝を知り、テレビをつけたら折よく日本とデンマークの試合の録画中継中。勝利を知ってから試合の展開をじっくり眺め、日本選手の活躍ぶりを見るのもいいものだ。ついつい見入った。

日本チームの猛攻が続き、試合はまさに佳境に入ろうかというその時、突然「プシュ」という感じで画面から映像が消えた。「Troi oi!! (チョイオイ)」と思わず口走る。日本語で言ったら、さしずめ「なんてこったい!!」

停電だ。よりによって、日本が大勝した試合を気分よく見ている最中に停電だなんて!!だが、私の腹立ちはそれだけではない。「プシュ」を皮切りに、長い長い、暑い一日が始まったからだ。夕方6時まで12時間に及ぶ停電。

私は、2008年6月からベトナム北部のハイフォン市に住んでいる。ハイフォンと言えば、ベトナム戦争の折には世界からの支援物資を受け入れる海の大要衝だった。それがために米軍の北爆の標的となり、1972年に港が機雷封鎖された町である。だが、その歴史を知っている日本人は今や数少ないかもしれない。むしろ、「世界遺産として有名なハロン湾の近くの町」と言った方が、分かりや

すいだろうか。

ここは、首都ハノイから100キロ離れたベトナム北部最大の港湾都市（ベトナムに5つある中央直轄市のうちのひとつ）で、海外貿易の北の玄関役を担っている。日系企業も多数進出し、広大な工業団地（NOMURA）がハノイへ向かう国道沿いにある。近年周辺町村を合併して面積が拡大し、現在人口は170万人を超える。

しかし、街づくりの基本であるインフラ整備が遅々として進まない。夏場の長時間の停電は、電力不足の対応策としての需給調整（送電停止）なのだ。ハイフォンの区部では町毎に週数回ずつ停電が実施されている。郡部ではほぼ毎日だと聞く。

ベトナムは日本と同様、南北に細長い国なので、地域によって随分気候が異なる。北部では四季があるが、最も長いのが5月から10月末まで続く夏だ。北部の夏の日中の蒸し暑さときたら半端ではない。「熱気がよどんで息が詰まりそう」という形容がぴったりだ。そんな状況で、市民は扇風機も使えずに（エアコンはまだ一般にはさほど普及していない）事務所や商店で仕事をしたり、家事をこなさなければならないのだ。

むろん、高級ホテルや外国人駐在員が住むサービスアパートメントには自家発電装置が完備しており、客が不自由することはない。一方、NOMURAの日系企業で働く生徒たちの話によると、国営電力会社から工場への送電がストップした場合、機械を停止するわけにはいかないので、どこもやむなく工業団地内の高価な第二電力を使ってのい

でいるとのこと（私が2年前、専任日本語教師として勤務していた大手の自動車関連企業では、突然の停電で昼間の数時間工場の操業ができなかったことがあり、大勢の従業員が暗い工場の床で、なすすべもなく寝ころんでいた姿を思い出す）。

近年ハイフォンには外資の大型スーパーが進出し、冷凍食品や大型容器に入ったアイスクリームも豊富に売られている。だが停電が日常化しているではこれらを買置きすることは不可能だ。生鮮食品のまとめ買いもむずかしい。だから食事の支度どきになると、近所の市場や露店でそのつど食材や惣菜を買ってきて、その日のうちに食べきる昔ながらの生活スタイルが健在だ。

ハイフォンの大学・高校近くには書籍や教科書を丸ごとコピーする「フォト・コピー屋」が軒を並べ繁盛している。日本や欧米では考えられない商売だが、私も授業で使う日本語教材を生徒に安く提供するためによく利用している。これが停電のあおりで昼間シャッターを下ろさざるをえない。まさに商売あがったり。

地区割りをして日にちと時間を定めての計画停電のはずだが、自分のところがいつ“その日”にあたるか、周知が徹底されていない。“その時”は突然やってくる。先週はいつといつだったから、今週はいつ頃と予測をするが、私の読みはいつもはずれて舌打ちをする羽目になる。今朝も今朝とて、朝食のコーヒーを沸かしてないうちに電気が止まってしまった。

ベトナムでは現在水力発電が中心だが、ベトナム政府は火力発電も推進する一方、2030年までに原子力発電所8カ所（原子炉13基）を建設し・稼働させる計画だそうだ。第1期工事の2基はロシア国营企業の受注が決定。現在2基の受注獲得に各国がしのぎをけずっており、日本も政府自らトップセールスに乗り出す熱の入れようだ。

また、報道によると、東京電力がベトナム国营エネルギー会社のペテロベトナム（PVN）と、大型石炭火力発電事業への参画に向けて6月22日に覚書を交わしたとのこと。東電はすでにベトナムで天然ガス火力発電事業を手がけているそうだが、今後、日本の電力大手他社も乗り出す可能性があることを報道は伝えている。

経済発展に伴って、ベトナムでは電力、水道、港湾、鉄道、道路といった基幹インフラの建設需

要が増大しており、ベトナム側の日本に対する経済・技術協力への期待は大きい。

一方、インフラ建設は巨額の投資が必要なだけに、ベトナム国内では事業の採算を懸念する声も強い。このことを示す出来事として、ベトナム政府が日本の新幹線方式の採用を決定していた「南北高速鉄道建設計画案」が、第12期第7回国会の最終日（6月19日）に、反対多数（国会議員474人中、賛成37.5%、反対42.2%）で否決されたのだ。政府の決議案が国会で否決されるのはベトナムでは異例であり、政府の面目も丸つぶれだが、これにより、計画は練り直しを迫られることになった。

ベトナムの国会は、政府案の追認機関ではないかと思っていた私は、この報道に大いに驚いたが、当地の友人知人はさほど興味を示さない。ハイフォンが新幹線計画からはずれた地域だからということだけでなく、国会議員が自分たちの代表から選出されているという実感が乏しく、国政が遠すぎて、その動向に注意が向かないのだ。

10年、20年先に向けた政府の約束より、きょう明日の暮らしの方が大事。まずは夏場の停電をなんとかしてほしい。大雨が降るとすぐに川や沼のようになる道路をなんとかしてほしい。交通量の増大で排気ガスと土ぼこりがひどく、マスクなしでは通行できない状況を改善してほしい。etc.でも、どこに訴えてもらちがあかない。

そこで人々は政治をあてにせず、より快適な暮らしを個々に求めて、自立自助、親族間の共助の道を探る。外資企業で働いたり、才覚を発揮して自ら事業を起こし、高収入を得たい。それには知識と技能を高めることが必要と考える。仕事をしながら夜間や土日に外国語、会計、経営学等を学ぶ人たちの通学バイクが、校門前の路上にあふれるゆえんだ。

夕方6時、ようやく電気が通じる。あちこちで安堵の溜息がもれていることだろう。

< 追記 >

7月1日、電力会社が突然「昼間の電力供給停止措置を当面解除する」と発表した。このところの大雨続きで水力発電用のダムが水量が豊富になったからだという。まずはめでたいが、天候頼みでは市民は今後も気が抜けないだろう。ハイフォンの暑い暑い夏はこの先長い。